



発行日 = 2008年6月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・中山 Rachel・三宅博行
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org http://www.shomei-tanteidan.org

照明探偵団通信

vol. 31 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート

中国調査 疾走する都市

広州 / 深圳

(3/3-6)

照明探偵団倶楽部活動 1

第 36 回街歩き

緩やかな光をまとう

多摩美術大学図書館

(4/23)

照明探偵団倶楽部活動 2

探偵団サロン 予告

「住まいの明かり 過去・現在・未来」

照明探偵団倶楽部活動 3

Transnational Tanteidan Forum

2008 in Belgrade 予告



広州・下九路

中国調査 疾走する都市 広州 / 深圳

2008.03.03-06

奥中 顕子+谷川 千晶

■北京、上海、そして広州？

2008年夏に開催される北京オリンピック。そして2010年に行われる上海万博。今回、訪れる広州でも2010年にはアジア競技大会の開催が予定されている。競技大会に向け、街のあちこちで急ピッチで建設工事が行われている。広州にはいったいどんな光環境が待っているのだろうか。

■珠江

広州市内を西から東へ流れる珠江の両岸に出現する夜景は、夜の最大の観光スポットとも言えるだろう。日が傾き始めた頃、どんな夜景が私たちを迎えてくれるのだろうか、撮影スポットでシャッターチャンスを待っていたのだが、ブルーモーメントになるはずの時には大気汚染で汚れた空が灰色にくすんでしまい、さらには珠江沿いのビルの窓明りが少しずつ灯り始めたものの、ビルや橋のライトアップもまばらで、想像していた夜景より随分と寂しい夜景だな…と拍子抜けしていた。



珠江沿いの夜景



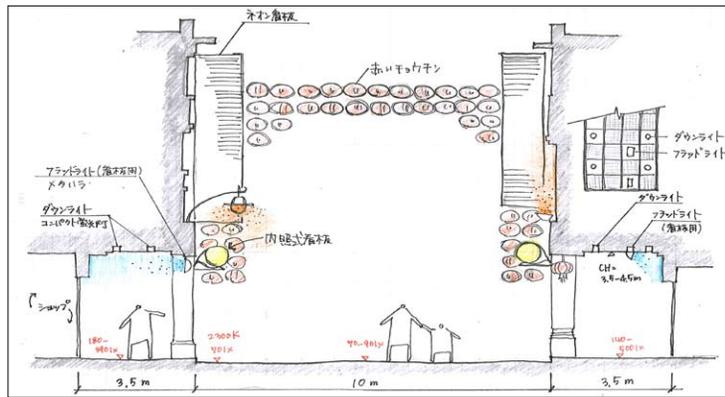
カオスの賑わい 下九路

しかし、空がすっかり黒く沈んでしまった頃に、遅れて点灯したのを取り戻すように、いくつかのビルはファサード全面が発光して、大量の光を放ち始めた。川の両岸にはブルーのリニアな光が走り、川沿いに連なるいかにも亜熱帯らしい立派な巨木が鮮やかなグリーンのフィルターがついたフラッドライトにより浮かび上がる。珠江の夜景に彩りを添えて、水面はすっかりカラフルなものになっていた。そのエキサイティングな光に誘われるように、大勢の人々が夕涼みに珠江沿いにやってきていた。建物が川に背を向け、水辺の風景が殺されてしまっている場所もあるが、広州の人々は上手に珠江のリバービューを楽しんでいた。ただ、一番夜景が映える時間帯がいつなのかという認識がないため、最も大切な時間にライトアップが行われていなかったのは残念だった。この珠江沿いの夜景はここ10年程で創り上げられたものらしく、以前のは真っ暗だったようだ。この景観作りが政府主導のもと、意欲的に行わ

れたため、短期間で広州を代表する観光スポットになり得たのだろう。広州市近郊の中山市、佛山市が中国の照明器具の一大生産地だったことも少なからず、このスピードを支えているようだ。

■ネオンの街、上下九路

上下九路は、騎楼と呼ばれる1階部分がセットバックしてアーケードのようになっている古い広州の商店街スタイルを復元した繁華街だ。ストリートには中国らしい真っ赤な提灯、ネオン看板や内照式の看板が無数に重なり合い、カオティックな賑わいを見せている。アーケード内は、各ショップやレストランが競うようにフラッドライトで店の看板を照らし、天井には剥き出しの直付コンパクト蛍光



下九路 断面スケッチ

灯がグリッド状に配置されて歩道面を煌々と照らし出していた。グリッド状に配置する配慮があるならば、埋め込みのダウンライトにしてはどうですか？ とついアドバイスしたくなる光景であった。上下九



煌々と照らされた騎楼

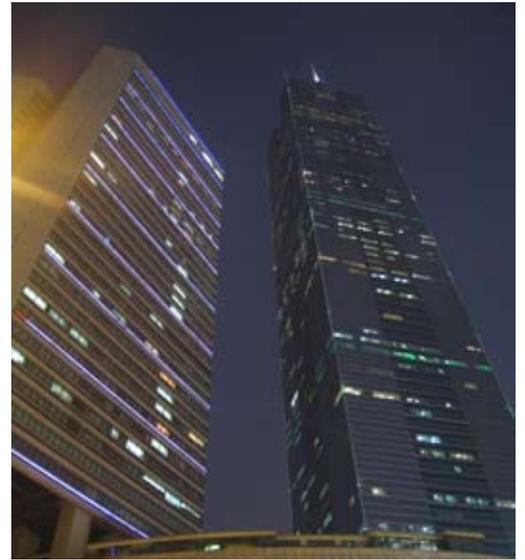
路は「ネオンの洪水の街」という印象を受けたが、上下九路より後に開発されたエリアに溢れかえり始めているLEDの量を思うと、いずれここも、「LEDの洪水の街」になるのだろう。

■天河地区

20年前の地図には建設中の天河体育館だけがぼつりと表示されていて、他に住宅も何もなかった天河地区。今や広州ビジネスの中枢を担う地区である。ここでもまた、中国のスピードに驚かされる。他のエリアとは様子が違い、ファサードライティングも全面にLEDを施したようなド派手ものはない。広州一の高さを誇るビル「中信広場」もメンテナンス階だけをランタンのように輝かせ（緑色ではあるが…）、建物のエッジをファイバーで繊細にかたどっていて、他のエリアより洗練されている印象を受けた。2010年に行われる広州アジア競技大会に向けて、まだまだ街のどこもかしこもアンダーコンストラクションで、2010年にはどのように様変わりした夜景が見られるのが楽しみだ。



2008年夏完成？と言われているザハ設計の広州オペラハウス



広州一の高さを誇る中信広場



深圳 - どこまでも伸びる道路



深圳の高層マンション郡

■インスタントシティ深圳

私たちは広州より電車で一時間半ほどの場所に位置する深圳にも足を伸ばした。深圳は香港と隣接している地理的重要性から、1980年に経済特区に指定された。それ以来、中国全土から人々が仕事を求めて押し寄せ、ほとんど更地に近かった小さな漁村が爆発的に人口が増えて巨大都市に変貌した。平均年齢28歳、在住人口1200万人とも言われる、世界に類をみない異常現象が起きている都市だ。

この都市を俯瞰すべく、SEG PLAZAに上った。そこで目にした光景は目を疑うようなものであり、私たちは思わず息を呑んだ。この夜景が30年弱で出来上がった夜景とは信じがたいほどに巨大で、すでに成熟していた。まず高所から目に留まるものと言えば、完全にヒューマンスケールを逸脱して、まっすぐに伸びる道路。それは深圳の都市計画が自動車を基準に考えられているからであり、遥か彼方までナトリウムランプの橙に染まっていた。そして、一年に人口が50万人も増えるとも言われている深圳において目撃した異常なまでの高層マンション郡から漏れる無数の光は妙に納得できるものであり、圧巻だった。じっくり夜景を紐解くと、全く同じデザインのビルが何棟も建ち並んでいる。とにかくスピードが求められる深圳において、設計期間を省くため、繰り返しのデザインに行き着いたのだろう。他と差別化したデザインを個性と考えるのが普通であるが、「繰り返しのデザイン」が深圳の特徴であり、個性だと感じた。（谷川 千晶）

第36回街歩き 緩やかな光をまとう多摩美術大学図書館

2008.4.23

新緑の風の気持ちよい夕暮れに街歩きに出かけました。今回の目的は、多摩美術大学の八王子キャンパスに2007年春に完成した新図書館。キャンパス全体の建築計画を担当されている田淵教授の案内のもと、図書館とキャンパス内を探索し、いつもの光あふれる市街地とは違う街歩きとなりました。

都心から約一時間、静かな多摩ニュータウンのそばに多摩美術大学八王子キャンパスはある。探偵団が到着したのはまだ陽の残る午後5時半、田淵先生とゼミの学生の方たちに迎えていただいた。図書館の前にある芝の斜面の上でキャンパスの概要や伊東氏の設計のいきさつなどを説明していただいた後、図書館に入った。



昼の図書館外観



田淵先生のお話を伺う団員たち



議論沸騰中



昼の館内の様子(1F)

■昼間の図書館

読書のように一点に長時間視線を集中する際、手元に影が出来るような指向性のある強い光は嫌われます。昼間の館内には、やわらかな陰影があり、場所ごとに少しずつ表情の違う景色をつくり出していました。2階の窓際に面した閲覧席では、自然のひかりが白く薄いカーテンを透過し、やわらかく手元を照らします。窓を覆うケヤキのシルエットやカーテンの模様も机に落ち、木漏れ日の陽だまりの中で読書をしているかのようです。そして、館内の中央では、コンクリートの天井スラブに反射した蛍光灯のヒカリが、曇りの日のような光環境をつくりだしています。雨の日にひとり本に向かうようなパーソナルな気分がつくり出されている様に感じられました。また、これらふたつの「ひかりとヒカリ」の色は、ゆるやかなグラデーションとなつてつながり、自然のひかりが内部にまで行き渡っているかのようです。そのことで生まれる開放感により、館内に気持ちのよい読書空間がつくり出されていました。



夜の館内の様子(1F)

■ヒカリのおぼん

1階部分の床の勾配や、2階へ上がる階段。これらは、移動するという行為を私たちに認識させ、独特な空間体験をさせてくれます。また、同時に空間をいろいろな方向から楽しむことが出来ます。

しかし、残念ながら間接照明器具は、そのことに対するデザインが見られませんでした。2階へ上がる階段からは、1階部分の照明器具の天板に並べられた蛍光灯が丸見えで、グレアとなっていました。今回のような街歩きの団員にとっては、裏側の仕組みまでわかるので興味をそそられますが、実際の利用者にはまぶしく注意をひきつけられ、移動中に見えてくる風景に集中できずにいるのではと思います。照明デザイナーは、日ごろの経験から、細部まで気配りの行き届いた照明環境を作り出さなければならないと考えさせられました。



間接照明器具のアップ



階段から見た間接照明器具



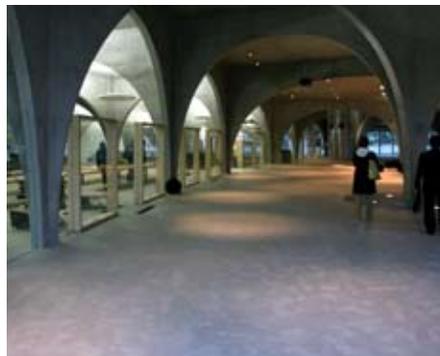
エッジが非常に際立って見える夜の外観

■夜間の図書館

昼間、自然光をふんだんに取り入れ周りの景色となじんでいた図書館ですが、日が沈むと、蛍光灯が煌々と館内を明るく照らし、周辺的环境から浮き立ってきます。私が、照明デザインをするのであれば、夜間は天井の間接照明を全て消灯することになります。そして、机や本棚の近くにあるスタンドライトの暖かい色で本の背表紙や手元がほんのりと明るくなり、館内の隅の方は外の闇に同化していく。夜はそのような明るさを抑えた照明で、周辺的环境と同化しながら読書にふけるのも悪くないかもしれません。(藤井美沙)



内部空間が浮かび上がって見える



図書館とは対照的に全般照明の抑えられたアーケード部分



暗いところのない読書空間(2F)

■無影空間

アーケードからアーチをくぐって明るい図書館内に一步踏み入ると、足元の影が消える。広がりのある空間で影がない、というのはいつもとちょっと違った感覚になる。なんだかかみがみな軽そうに見える。向きのない光に照らされて、人の影も什器の影もうすらとし、足元が床についているのかいないのか確信がもてなくなる。コンクリートは掴み所のない薄曇り空のようになる。普段は見えないはずの細かい凹凸がコンクリートの表面から取り去られて、素材の色の濃淡だけがもやもやと見えている。外から見たときにエッジが異様なまでに際立って見えるのも、窓の中のにぞくコンクリートがやたらとモヤモヤしているせいかもしれない。夜空をバックに見上げると中の空間だけがぼっかりと均一に明るく、そのまま建物が浮き上がっていきそうに感じた。

■明るい図書館／暗い図書館

この図書館を訪れて、そういえば図書館には2種類あると思った。活動の図書館と貯蔵の図書館といったところだろうか。近年求められているのは活動の図書館だ。どこにいても本を読める明るさが確保され、多彩な情報がわかりやすく配置されている。この図書館はそれらの中でも特に優れている。誰もが使いやすく、新鮮な情報にあふれた図書館として、行き着くところまで極められていると思う。貯蔵の図書館の光景は、ちょっと埃っぽくて、遠くの窓から入った陽光が煙って、真昼間でも自分のいるところまでは届かないような感じだ。奥の方には何が眠っているのか誰にもわからないような、無量の本にうずもれていく雰囲気をもった図書館奇譚に登場するような図書館も捨てがたい。そんな光環境を新しく作る必要があると思うわけではないが、たまには味わいに行こうと思った。

■ランドスケープ

キャンパスには比較的低層の建物がゆったりと並ぶ。正門から中心部にかけてホールやメディアセンターなどが並び、外周に近いところに各学科のアトリエが配置されている。夜のキャンパスは人もまばらで全体的にかなり暗めだが、広場の光と建物からもれてくる光とで、明かり溜りがまばらにぼつぼつとできている。建物からの光はガラス張りの工房や、各科のエントランスの展示空間からだ。惜しむらくは、広場とその周りがさびしい。広場のポール灯は寂しい色だし、光源のほうが目立って明るい感じがしない。建物や広場をつなぐ小径では、背の低い灯具が点々と散在して、さびしい感を助長している。暗い夜は大学という場所に似合っていると思うが、光源を高くして配光を工夫し、離れ離れになってしまっている明かりを繋げてあげたいと思った。(三宅博行)



闇が広がる中に明りが点在する夜のランドスケープ



正門からすぐの本部棟石垣は青にアップライトされている

照明探偵団サロン

第1回「住まいの明かり 過去・現在・未来」開催！

2008.7.11

田沼彩子

照明文化を語るのに、まず大切なのが住まいのあかりです。

住宅照明は私たちの光に対する感性や固有の照明文化を育みます。住まいのあかりは照明文化の原点です。

私たち日本人は一体どんなあかりとともに暮らしてきたのでしょうか？

東京では今、住まいの明かりに何が起きているのか。白熱灯が住まいから消える・・・そんなことが起こるのか。

未来の住まいにはどんな光の事件が起こるのか。

照明探偵団は3回シリーズのサロンで、さまざまな角度から住宅照明の過去・現在・未来を探偵します。

第1回目のテーマは、『過去から現在へ住宅照明を探る』。

かつての日本には天井照明がありませんでした。日本の家屋には夜の時間を過ごすための素敵な“フロアスタンド”がたくさんあったのです。横から横へと流れる光が和の照明の基本。こんな単純な日本の住まいに生きるあかりの美意識を、私たち現代人は忘れ去ろうとしています。戦後の高度経済成長とともに、隈なく、煌々と白く輝く光で満たされてしまった日本の住宅。

今回はゲストスピーカーに建築家・インテリアデザイナーの浦一也氏を迎え、日本に昔からあった理想のあかりのあり方を探ります。

また、照明探偵団が京都の古民家を調査し、日本家屋の光環境について分析した結果をレポートします。

- 開催日程 2008年7月11日(金) サロン: 18:00-20:00
※サロン終了後、21時まで懇親会を予定しています
- 場所 エコツツエリア(新丸の内ビルディング10階)
- 募集人数 100名(応募多数の場合は抽選)
- 参加費 1,000円
- 主催 照明探偵団
- 特別協賛 三菱地所株式会社

【プログラム】

- ・照明探偵団レポート 『京都・吉原邸に学ぶ 和のあかり』
『戦後の住宅照明史』
- ・対談 面出薫×浦一也 『過去から現在へ住宅照明を探る』

【浦一也氏 プロフィール】

建築家・インテリアデザイナー

東京藝術大学大学院修了。

日建設計を経て94年日建スペースデザインを設立。

現在同社代表取締役。

主な作品にヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル、

メディアージュ、京都迎賓館など。

著作に「旅はゲストルーム」。

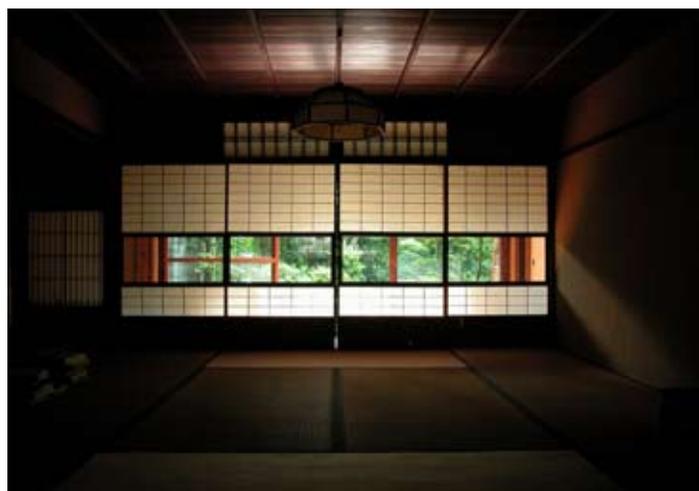
※次回以降の予告

第2回: 2008年10月17日(金)

「白熱ランプが住宅から消える？」

第3回: 2009年1月16日(金)

「現在から未来へ住宅照明を展望する」



Transnational Tanteidan Forum 2008 in Belgrade

2008年9月19日開催決定！

第7回目となる世界照明探偵団フォーラムは、セルビアの首都・ベオグラードで開催されます。

2002年に東京で開催されたのを皮切りに、ストックホルム、ハンブルグ、ニューヨーク、シンガポール、コペンハーゲンの各都市で開催してきたフォーラムですが、今回は旧ユーゴスラビアの首都でもあったベオグラードが会場となります。

今回のフォーラムのテーマは“Lighting Identity of City”。

これまでのフォーラムでは、様々なパブリックスペースのあかりをテーマごとに取り上げて来ましたが、今回は街全体を俯瞰するような目線に移し、都市としてのあかりの特徴を捉えたいと思います。

それぞれの都市に特徴的な光とはどういうものなのか？光で都市を表現するとしたら、どんな絵を描くことができるのか？都市を形成する一要素として光を捉え、都市による違いを浮かび上がらせるようなフォーラムにしたいと考えています。

今回も世界に広がる照明探偵団の各支部からの参加が予定されており、プレゼンテーションは、ニューヨーク、ハンブルグ、コペンハーゲン、東京、シンガポール、そして初参加の北京から行われます。

また、今回はベオグラードの夜の街を歩くワークショップもプログラムされており、ストックホルム、ベオグラード、東京などから学生たちが参加を予定しています。

もちろん次号でレポートしますが、現地に行ってフォーラムにぜひ参加してみたい、という方は事務局までご連絡下さい！

(田沼彩子)

写真：ベオグラード市の夜景



【照明探偵団の活動は以下の 21 社にご協賛頂いております。】

ルートロンアスカ株式会社
岩崎電気株式会社
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
松下電工株式会社
ヤマギワ株式会社
山田照明株式会社
マックスレイ株式会社
ニッポ電機株式会社
エルコライティング株式会社
ウシオライティング株式会社
株式会社フィリップスエレクトロニクスジャパン
トキ・コーポレーション株式会社
東芝ライテック株式会社
大光電機株式会社
コイズミ照明株式会社
マーチンプロフェッショナルジャパン株式会社
タルジェットイ ポールセン ジャパン株式会社
株式会社遠藤照明
湘南工作販売株式会社
株式会社ウシオスペックス
森山産業株式会社

